

# 朝日歌壇 俳壇



〈ウメⅡ〉 日高理恵子

### ◆長谷川 權選

主婦歴も戦歴もながながし (四街道市) 大塚 厚子  
日向ぼこ能登を思へば勿体なや (高岡市) 野尻 徹治  
元日夕「にげてくたさ」連呼せり (倉敷市) 森川 忠信  
舟眼を聴くしんしんと冬があり (越谷市) 新井高四郎  
☆涸沼の最後に光あるところ (静岡市) 松村 史基  
湯の中のわが手わが足春を待つ (平塚市) 日下 光代  
能登思ふ明朝は雪と聞けばなほ (市川市) 阿部 弘子  
雪折や舐めて治せし腕の疵 (八王子市) 長尾 博  
山眠る狼の夢熊の夢 (岐阜県垂井町) 北嶋 克司  
戦なき星を見上げてごまめ囃む (草津市) あびこたろう

【評】一席。主婦の歴史を刻む戦。手当て怠りなく。二席。能登半島地震の同じ被災地といっても。隣の富山県の人。三席。NHKアナウンサーの絶叫。あれで救われた人多数。十句目。戦争の神(マース)の名を持つ火星でさえ戦争はない。

### ◆大串 章選

冬の浪陸に上がりしゴジラ岩 (鎌倉市) 小椋 昭夫  
大小の水鳥湖水分かちけり (今治市) 横田青天子  
探梅や小さき橋に名を見つ (東京都世田谷区) 百瀬 俊夫  
凍蝶の岩に溶け込む模様かな (玉野市) 加門 美昭  
定年の無き政治家や鬼やらひ (さいたま市) 齋藤 紀子  
亜紀偲ぶ歌の数々新年会 (立川市) 笹間 茂  
ふるさとの終着駅や雪あかり (福島県伊達市) 佐藤 茂  
嘶家の手に熱燗のみえるまじ (川崎市) 小関 新  
息白く大事なことをささやけり (東京都世田谷区) 須藤 渉一  
☆涸沼の最後に光あるところ (静岡市) 松村 史基

【評】第1句。能登半島地震で地盤が隆起し、海に立っていた「ゴジラ岩」が陸続きになった。第2句。大きな白鳥や小さな鴨たち、それぞれ湖を楽しんでいる。第3句。この「小さき橋」の名前は何だろう。探梅にはこうした出会いもある。

### ◆高山れおな選

愚者の夜をしるじろとして牡蠣の殻 (東京都新宿区) 各務 雅憲  
シャンブーの香のぶんぶん猫の妻 (伊万里市) 萩原 豊彦  
ラガーらを遠景に置く碧儀かな (横浜市) 飯島 幹也  
屋の月ペンチに仰ぎ日向ぼこ (高槻市) 日下遊々子  
寒鯉の沈思に太りゆくばかり (日立市) 加藤 宙  
能登寒し龍のたうちし爪のあと (北九州市) 安部 大真  
学位得てふるさと歩く小春かな (伊賀市) 福沢 義男  
ともかくも喰つても言へ聞夜汁 (矢板市) 菊地 壽一  
雪女道なきところ好きと云ふ (玉野市) 勝村 博  
大寒や脳が欲しがるとチョコレート (岡山市) 曾根ゆうこ

【評】各務さん。飽食し酒が廻り、私は今「愚者」である。萩原さん。湯上りの人間の(作者の)妻に、折しも聞こえる恋猫のイメージを重ねて。飯島さん。同時投句に「東京の火事を見ている宣教師」。共に俳句的遠近法のうちに配合の妙が。

### ◆小林 貴子選

グラタンを元気にしたるブロッコリー (札幌市) 伊藤 哲  
図書館のストープ僕のためだけに (京都府京丹波町) 三井田秀太  
自認するチキンハートや大試験 (下田市) 森本 幸平  
パレットもう洗ひ納めや山眠る (札幌市) 樋山ミチ子  
涸れつつも水になほ行へんころさし (東京都足立区) 望月 清彦  
ラグビーのボール立たせて後退る (浜松市) 久野 茂樹  
北風が心の傷を広げさせ (宇都宮市) 古野 景子  
二つだけ白川郷のこもりがき (京都市) 岡村 紅里  
浮草と薄氷の後朝とても (岐阜県揖斐川町) 野原 武  
ワインテージロック子猫の踊り出す (敦賀市) 中井 一雄

【評】一句目。白色が基調のグラタン皿の中に、ぐっと目立つ緑色。二句目。自分一人のために、ストープよありがと。三句目。小心の人もあるが性的人也。深呼吸して頑張れ。四句目。春が来たらまた絵を描いてほしい。八句目の作者は十歳。

## うたをよむ 「月並」宗匠たちの句

為永 憲司

一九二九(昭和四)年に改造社から刊行された『現代日本文学全集』の第三十八篇「現代俳句集」には、百七十人の俳人の作品が並ぶ。この本の興味深いところは、冒頭に正岡子規ではなく月の本為山から阿心庵雪山人まで十七人の、いわゆる「月並派」の宗匠たちの句を記したところだ。子規による「旧派」排撃以来、陳腐卑俗と退けられてきた彼らの句に私は心惹かれる。編集長を務める「俳壇」一月号でも特別企画を組んだ。

浮雲鳥見て居る雪のからず哉  
とし立つや結びて長き箱の紐  
春風や遙かの丘の人の声  
椋鳥は知らぬ納豆茶漬かな  
はつ日の出暫時あつて波ひとつ  
俳諧の腹調へん河豚汁  
江戸以来の俳諧に遊び、滑稽に命をかけたよつという心意気、清潔で平和な俳風は、いま読んでも新鮮なものがある。これらの句を、俳諧者流の「月並」と一概に否定すべきではない。彼らの句に

俗臭を感じる時、そこに近代を経てきたわたしたち自身の心の曇りや歪みがないと言いつけるだろうか。宗匠たちもまた俳句を愛し、日々俳句に向き合っていたはず。同じく俳句を愛する者として、彼らの句の豊かさに心を通わせてみたい。正岡子規が俳句革新に動き出す前に、月並宗匠の俳句をしっかりと学んでいたことは大きな意味を持つ。高浜虚子たちの月並研究は、「月並」の意味と内容を研究し、その当時の俳句にも反省を促した点で興味を尽きない。現代の新しい月並研究がおこなわれてもよい時期ではないか。(「俳壇」編集長)

渡辺松男歌集「時間の神の蝸牛」 2017年7月までの未発表作を収めた第11歌集。「花とはちがふ白い狂気がうすくあるそめふよしのと空とのあはひ」(書肆侃侃房・2860円)

◇朝日歌壇 入選取り消し 2月4日付「どんぶりで量る堅田の寒蛭一合二合すぐ売り切れて」は、同じ作者による類似歌がすでに発表されていたので入選を取り消します。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。